

コロナ禍での日本の劇場・オペラ団体 ～新国立劇場に聞く～

村田直樹 ((公財) 新国立劇場運営財団常務理事)

石田麻子 (聞き手／『日本のオペラ年鑑』編纂委員長)

2021年8月5日実施

コロナ禍での新国立劇場

石田：新国立劇場の2020年の公演状況について教えていただけますか？

村田：研修所公演は別として、最初に中止になったオペラ公演は3月中旬に始まる《コジ・ファン・トゥッテ》です。緊急事態宣言が出る前の2月27、28日くらいには、政府から非常に強い要請を受けて、新国立劇場の2月末から3月にかけての公演が中止となりました。

4月の《ジュリオ・チェーザレ》については、すでに海外アーティストが来日してどんどん進んでいて、もうやる気十分でリハーサル室で準備をしていたのですが、結果的には中止にせざるを得なくなりました。新国立劇場で取り上げるのは初めての演目でしたので、本当は映像記録だけでも残せないかと考えたのですが、そこまで海外アーティストを拘束できないこともあり、舞台ではなくリハーサル室でちょっとした構造物を一部置いたり、リハーサル風景を映像に収めて、みなさんにご覧いただきました。

話が少し前後しますが、オペラでは《コジ》が中止になり、年度が明けて、4月7日に緊急事態宣言が出て、この時は法律に基づく事実上の劇場閉鎖という形になりました。リハーサル室も使ってはいけないということで、われわれはバレエ団も抱えていて、ダンサーは日々、体を動かさないと駄目になってしまうのですが、そのバレエ団の毎日のお稽古もや

らせてもらえない状況でした。

統計的にいうと、令和2年度にあたる2020年4月から2021年3月までのオペラで中止にした公演は、主催公演で5演目17公演¹です。4月の先に申し上げた《ジュリオ・チェーザレ》《ホフマン物語》、5月の《サロメ》、6月の《ニュルンベルクのマイスタージンガー》²、そして夏に東京オリンピックとパラリンピックの谷間の期間に、盛り上げのためにやろうということで予定していた《Super Angels》も準備が整わないということで中止をしています³。

新国立劇場では主催公演と普及公演を分けており、普及公演としては「高校生のためのオペラ鑑賞教室」《夕鶴》を7月に予定していたのですが、こちら側も準備できなかっただけでなく、文科省による一斉休校で、その時期のカリキュラムが全部後ろに回ってきてしまったという学校側の事情もあって、中止にしました。ただこの時は、当初《夕鶴》を予定していたんですが、せっかくの鑑賞機会だったというので、《魔笛》を、通常の学校の授業に収まるよう45分ぐらいのダイジェスト版にまとめ直して、参加予定だった高校に

¹ 2020年7月の普及公演《夕鶴》、同月の地域招聘公演（びわ湖ホール）《竹取物語》を除いた数字。

² 《ニュルンベルクのマイスタージンガー》は2021年11～12月に延期のうえ公演。

³ 《Super Angels》は2021年8月に延期のうえ公演。

DVDなどで配布すると同時に、期間限定で関係者のみが閲覧できるURLを提示して、オンラインで映像が見られるという状況にしました。

石田：先ほど5演目17公演と言われましたが、これらの主催公演が中止になった時の最終決定は村田さんがされるのでしょうか。

村田：最初の頃は、コロナ対策会議というのが財団の中に設けまして一私もその一員ですが、そこで議論をして、それを理事長に上げて、必要に応じて芸術監督と協議をするという形をとりました。特に、初期の段階は初めてのことでありましたので、芸術監督と十分調整をして最終的な決定をしたということになります。

石田：中止公演を発表するたびに、SNSなどでは、われわれの悲鳴に近い思いが、ずいぶんと見られましたが、中止、あるいは延期という名の下でのキャンセルについて、お客さまからの反応というのは、どのように届いていましたでしょうか。

村田：最初の頃は、やはり非常にネガティブな、強いクレームというか、お怒りモードのご意見というのが、特にボックスオフィスに対してあったということですね。急な中止もありましたので、もっと早めに知らせしてほしいというようなご意見が、特に2020年3月の頃にはありました。

石田：新国立劇場では、政府からの要請に模範的に対応する立場にあり、厳しい判断をされるケースが多かったのではと思いますが、いかがですか。

村田：既に海外から来日してきたアーティストで、実際にリハーサルもやっていると、制作している側としては、ぜひお客さまに観てもらいたいという気持ちがある一方で—今からすると、それほど感染者が多くないのですが—、やはり当時の日本の感染状況からすると難しかったというのと、欧米ではすでにそ

の頃にはかなり長期にわたって劇場を閉める判断をしつつあって、逆に日本が何でやっているんだと見られていたという状況でした。ですから、その2つのせめぎ合いもある中で、政府からの強い要請で決断をしていったということですね。

映像配信にあたって

石田：公演が中止になっていきつつも、「巣ごもりシアター」の配信もずいぶん話題になりました。

村田：はい。劇場閉鎖中に「巣ごもりシアター」というタイトルで、過去のオペラ作品やバレエ作品を配信するということをやっておりました。

石田：これは無料配信されていましたが、出演者の権利関係の処理というのは、どのようにされていたのでしょうか。

村田：オペラについて言いますと、基本的には大野和士芸術監督が着任されて以降の作品になっていまして、大野監督になった時に、われわれの方針もそうだったんですけれども、映像配信について、基本的に新国立劇場側が権利を持つという趣旨の契約になっておりまして、そういう作品を上映しております。われわれとしては記録映像として撮ってきていた映像です。「巣ごもりシアター」の配信によって、接続数のキャパシティ^{ビメオ}を超えてしまう可能性があったので、Vimeoという会社と容量を拡充する契約を結び直すことはしましたが、有料でやるとチケット販売もしなくてはいけないし、あるいは、ネット上で課金するのであれば、そのシステムが整わなければならないということもあって、無料としました。

同時に、オペラではないですが、バレエについては、振付家を含めて権利関係の処理が難しいため、無料にすることで権利者とより短期間に調整ができるという、オペラとは別

の理由から無料としました。

契約相手方によっては、有料配信にした場合には、契約上、一定の支払いも生じる内容にもなっていたこともあります。

劇場再開に向けて

石田：先ほど新国立劇場のバレエ・ダンサーの方が、リハーサルが全くできない時期があったというお話がありました。もちろん新国立劇場の合唱団も大きなハードルを感じられたところがあったと思います。バレエ団や合唱団の稽古といったものが徐々に再開する時期のお話をお聞かせいただけますでしょうか。4月7日に緊急事態宣言が発出されて、完全に動けなくなってしまい劇場自体も休館になった期間が1カ月ほどあり、さらに5月25日に緊急事態宣言が全国で解除されたりということで、4～5月にかけての間は、完全に劇場ではアーティストの稽古などはできなかったということでしょうか。

村田：緊急事態宣言中はできませんでした。ただ、バレエ団は確か5月に入ってからだったと思いますが、リモートで始めています。吉田都芸術監督の意向もあって、1人だけこの劇場の会議室で、会議室でできる範囲の体慣らしというかストレッチ的なものを始めました。ですから、5月の宣言解除まではリハ室も全く使えない状態でしたね。

石田：なるほど。合唱団の方は、その間、全く動けなかったのでしょうか。

村田：そうですね。もともと公演がなくなってしまったので、公演がなければリハもないということです。

石田：続いて公演再開についてお話しいただけますか。

村田：新国立劇場としては、オペラの主催公演では10月の《夏の夜の夢》から再開したということになります。この10月の公演は、海外からのスタッフやアーティストの来

日が困難となり、リモートでの演出が行われました。そのため歌手も大幅に入れ替わりました。次の11月の《アルマゲドンの夢》が、新国立劇場として第1回目の緊急事態宣言後に、初めて海外からのアーティスト、演出家を招聘しての公演実施となり、その後は基本的には《フィガロの結婚》《ワルキューレ》まで、交代もありましたけれども、海外のアーティストも一部参加しています。《ワルキューレ》ではヴォータン役を、別の公演で1月末ぐらいに来日していた歌手1名に残ってもらい出演していただきました⁴。

《夏の夜の夢》のリモートでの演出というのも時差があって、なかなか難しいところがあるのですが、逆に時差を利用して、こちらの昼時間に、前の夜にもらった演出家の指示に基づいてリハをやり、その様子を映像で撮って夕方までに送っておいて、それをまた演出家が見て指示を出すということが、舞台裏では行われていました。

その他、再開までの準備としては、7月にオペラパレスの換気状況の実験データというのを蓄積し、ピットでオーケストラをどのように配置するかを、実際にオーケストラの協力を得て工夫をしました。その時には、ピットの深さを少し浅めにとって、換気をさらによくするとか、ピットと客席を隔てるバーも通常よりは少し低めにセットすることで、ピットの閉塞感、あるいは換気環境というものをよくするというのを検討しました。

座席については、ガイドラインで、演じる部分から2m以上離しました。ピットから2mというと2列目になるのですが、先ほど申し上げたように、普段よりは少しピットの底を上げて、かつバーを下げているので、指揮者の頭が通常よりは出てしまうわけです。その

⁴ 大阪国際フェスティバルの「ワーグナー特別演奏会」のために来日していたミヒャエル・クプファー＝ラデツキー。

ため、いわゆる見切れ席が出るので、見切れ対策ということで、3列目までを売らないことにしました。実際に1年ほどその運用でやってきて、3列目の見切れはほとんどないということが分かったので、この2021年10月の新シーズンからは2列目までは売らないが、3列目はチケット販売の対象にしています。

石田：少しずつ再開に向けた準備をされていたわけですが、例えば10月の公演を実施するに当たって、稽古場を使う方、スタッフも含め関係者へのPCR検査は行われたりしたんでしょうか。

村田：新シーズン、10月からのシーズンについては、稽古開始前、あるいは実際の公演が始まる数日、1週間とか10日前ぐらいというタイミングで、最初の頃は、最低1回はPCR検査をやっていました。その後、SmartAmp法というウイルス検査の検査法—これは厚労省にも認められた検査です—が、検査結果が比較的早く出るというのと、偽陰性と偽陽性を限りなく減らすことができる検査体制を敷いているということで、その手法を採用している業者をお願いをしてウイルス検査をしています。

石田：なるほど。10月から公演を再開しようと思われて、いろいろ動いていらっしやったわけですね。劇場自体が、音楽稽古や合唱の稽古を始めたというのは、いつ頃からだったのでしょうか。

村田：合唱団が、9月に東京二期会がうちの劇場でやった《フィデリオ》に出るということもあったので、8月にはもう稽古していたのではないかと思います。劇場としては、7月頭くらいから演劇公演を小劇場ではやっておりまして、この時は、エンデの『願いがかなうぐつぐつカクテル』という、ちょっとファンタジックな作品だったこともあって、衣裳で口の前を覆うようなものとか、フェイスマスクみたいなものを適宜役柄に応じて着

けるということでやりました。

バレエは7月の末に、子どもバレエで新制作の『竜宮』というのをやりました。バレエではリフトとか接触を避けるというのはなかなかできないんですが、新制作だったこともあって、そういうことに配慮して振り付けをした作品を上演しました。

石田：なるほど。《夏の夜の夢》の演出も、ソーシャルディスタンスを舞台上で取り、歌手は離れて前を向いて歌うという演出でしたね。

村田：そうです。劇中劇でもずいぶん距離を取りました。《アルマゲドンの夢》に至っては、死ぬんだけれども倒れない、みたいなこともありました。

石田：倒れない？

村田：はい。台本上は死ぬのですが、体をややのけぞった感じになったことで倒れたことにしました。歌っているところの床なので、飛沫が飛んでいるということを考慮したんだと思います。また台本上では、ベッドシーンもあったのですが、そこも非常に距離を置いた演出になっていたと記憶しています。

石田：一度そういう演出をされると、再演する時もそういう演出のままになるのでしょうか。

村田：いや、そこは本来の演出ではないので、《アルマゲドン》は再演する機会があれば、本来のものでやる可能性もあると思いますね。

石田：それはそれでまた楽しみです。本当に素晴らしい成果だったと感じておりますので、ぜひ再演をしていただければと思います。

村田：他の作品ですが、合唱団が入り組んで動くというのも避けるために、人数を若干減らしたりとか、舞台の上げ舞台のところの前のスペースで合唱団の一部が動くとか、作品によっていろいろと変更を加えて上演をしていますね。

石田：上演プログラムを企画する上で、コロナ前とで何か変わることはありましたでしょ

うか。例えばプログラムだけでなく、指揮者や歌手の起用ですね。日本人でキャスティングするということが増えてきました。今までと、これからのWithコロナ時代のプログラミングの変化について教えていただけますでしょうか。

村田：作品ということと言いますと、ご存じのようにオペラの場合は、出演者との契約など様々な契約が2～3年前から進んでいますので、作品を変えらるということになると非常に難しい。ですから、結局は出演者や演出で工夫をしているということです。出演者では、海外からのアーティスト招聘を念頭に置きつつも、普段であれば本番を歌ってもおかしくないような方を、あらかじめカバーとして確保しておいて、来日できなければその方に本番を歌っていただくという工夫を現場ではしています。

石田：なるほど。それによって日本人の若手を含め中堅などの出演機会が増えてきて、それはそれで喜ばしいのかなと思ったりもするのですが。

村田：そうですね。新国立劇場のオペラ研修所出身者の人が活躍をしたりして、そこは非常にわれわれも喜ばしいと感じています。

石田：先日の《カルメン》(2021年7月)も面白くて、いい結果でしたし、日本人組はバランスが何といっても素晴らしかったですよね。

これまでオペラ研修所の話が何度か出てきました。オペラ研修所も新国立劇場の大きな事業の1つかと思います。オペラ研修所のこの1年の動きを教えてくださいませんか。

村田：オペラ研修所でいいますと、2020年は入所式でもできませんでした。それで緊急事態宣言中は辛うじて座学の部分をリモートで実施をするという対応でした。ですから、実際に歌えるような状態になったのは、宣言が明けてからになりますが、小さな部屋での研修

はコレペティとの間にアクリル板を置いたりといった感染対策を講じながら対応しました。当初、7月に予定していたオペラ研修所の公演は中止にして、その代わり9月の頭にバレエ研修所と合同でのガラ公演を行いました。

再開後のお客さまについて

石田：新国立劇場でのオペラ公演の再開では、私などは乾き切ったところに、水がずっと入っていくように、すごくうれしい思いで伺った思い出があるんですが、お客さまの反応はいかがでしたか。数字上の戻りも含めて反応を教えてくださいませんか。

村田：そうですね、難しかったのは、最初は50%で販売していて、その後100%に緩和された時に、われわれは空けていた四方の席や前の方の席も追加販売をしたんです。それに対して、「後から買う人が前の席を買えるのですか?」とご不満を述べられる方、「横に人が来ないだろうと思ってチケットを買っているのに人が座ると怖い」とおっしゃる方、「感染リスクが高まるんじゃないか」と気にされた方、いろいろおられました。これはチケットを販売しているボックスオフィスでのことですので、公演に来られたお客さまということよりは、公演に来られる前の声ですね。

実際に公演をご覧になったお客さまは、アンケートにお答えいただいたお客さまということになるわけで、そういう意味では少しバイアスがあるかもしれませんが、みなさん肯定的で「久しぶりに見られてとてもよかった」とか、「新国立劇場の感染対策で非常に安心して観られた」とか、そういう肯定的な反応が多い感じです。

お客さまの入りからいうと、オペラはお分りのように高齢の方が多いのに対して、バレエはわりと若い方が多いんですが、バレエと比較をすると、お客さまの戻りという点で

は、オペラはまだ十分に戻ってきておりません。ワクチン接種が高齢者の方から進んでいるので、そこで好転することを期待はしたいところです。

コロナ禍での資金調達について

石田：新国立劇場は、国からの資金は管理運営に使われ、チケット収入、ボックスオフィスの収入などが制作費に回っているというのが、私の理解ですが、それは正しいでしょうか。

村田：一部の芸術祭の主催公演などは除きますけれども、基本的にはおっしゃるとおりで、入場料収入と寄付金収入と、貸劇場収入、これらがわれわれの公演経費の財源であり、その3つの収入で主催公演をやっています。

石田：そうなりますと、令和2年度つまり2020年度に関しては、公演の中止が非常に多くてチケット収入が上がらないですし、民間の団体も公演がしにくくなった関係でキャンセルが出て、貸劇場収入も恐らく減少したのではないかと拝察します。そうした中で、公演費をどのように確保するのかという、非常に頭の痛い問題があるのではないかと思います。その辺りはいかがでしょうか。

村田：幸いといえますか、飯守泰次郎さんの任期の最後の2年ぐらいと、大野さんの1年目ぐらいで、けっこう収入が上がってまして、その剰余金を、台風とか地震とかで公演が中止になることを想定して、特定資産ということで5億円ほど積み立てていたんです。さらに、これは前からやっていたのですが、収入がけっこう上がったので、それを将来の公演のために計画的に積み立てをした部分がありまして、そういうものを含めると9億円ぐらいあったのです。結局、この大半を消費して、今はほとんど無い状態です。

石田：公益財団法人で剰余金を、結果として9億円持ちだったということなんですけれ

ども、これは会計上どうされていたんですか。

村田：9億円のうちの5億円というのは、そういう損失が出た場合に充当する基金として積み立てていたと。あとは、大体この先3年から5年ぐらいにこういう公演に使うということで、積み立てていたものを前倒しして取り崩すことを視野に入れて新年度の予算を組んだということになります。

石田：それがほとんど無いというのも、ちょっと大変な状況だと思いますが、そうした中で、公演のキャンセル料というのも、キャストやスタッフの方々にはお支払いになったということでしょうか。

村田：そうですね、中止した公演について全額を払うというケースは、よほどリハーサルが開演直前まで来ていたとかという場合は別ですが、契約に基づいた協議によりお支払いしています。

石田：先ほどのオペラのお客さまの戻りの話と関連しますが、まだまだチケットの売り上げは元通りにはなっていないということでしょうか。

村田：そうですね。そういう意味では、今年度の財務的なやりくりというのも非常に厳しくなりつつあります。

石田：それを補うために、例えば個人の寄付やファンドレイジングなど、以前とは違うという点がありますでしょうか。

村田：そうですね、根っこは前からあるのですが、インターネット小口寄付というのをやっていて、例えば「巣ごもりシアター」の時に、そういう仕組みを併せて広報することで、小口寄付を集めるということをしてますし、国がチケット代の返金を寄付するという仕組みを整えてくれましたので、それも積極的に活用させていただいています。普通だと返金手続の書類というのは、返金するためだけの書類になるわけですが、そこに「寄付する」という欄をあらかじめ入れこみ、それ

をお送りしてご寄付をいただくという形にして、寄付の確保ということも一生懸命やっているところです。

石田：その他に、国からのコロナ対策補助金は、具体的に活用されたのでしょうか。

村田：頻繁に使っているのは、今はJ-LODliveですね。これは令和2年度にずいぶん中止にした公演があったので、それをベースに令和3年度は積極的に活用していますし、文化庁の新しい補助金も申請をしっかりとやっているところです。令和2年度の第3次補正予算が1月末に成立したのですが、これで、われわれの親会社である日本芸術文化振興会に対して、約9億円が運営費交付金として配分をされており、コロナの下でのいろんな工夫、あるいはコロナ対策のための経費、そういったものに充当できるということで、これを振興会からわれわれのほうに、そのうちの4億5,000万円ほど追加で委託費を配分していただきました。これをさまざまなコロナ感染対策用の経費に充当したり、先ほど申し上げた、演出上の工夫で必要になってくる経費に充当したりとさせていただいています。

今後のストリーミング配信について

石田：先ほど「巣ごもりシアター」の話が出ましたが、コロナ禍で注目されているストリーミング配信は、新国立劇場の戦略として、今後どのように使っていかれる予定でしょうか。アメリカのメトロポリタン歌劇場など海外のオペラハウスは、今までの撮りためたものをどんどん出していますが、今後も含めて配信に取り組まれるご予定があれば教えてください。

村田：配信の目的はいろいろあるのだと思います。まずは、劇場が東京の初台にしかないもので、初台まで観に来られない方々に鑑賞の機会を提供するというのがあります。あるいは、新国立劇場という劇場そのものの存在を

知っていただく、普及的な意味での無料配信という選択肢もあるだろうし、他方で非常に財務状況が厳しい中で、新たな収入源ということで有料配信ということもあるだろうと。そのバランスを取りながらやっていく必要があると考えています。

映像の撮り方も少しずつ工夫はしていますが、劇場の構造もあって、カメラの台数を増やすとなると、客席をつぶさないといけないですし、自動のカメラを設置するとなると、いろいろ設置場所も工夫が要ります。オペラのお客さまは、ちょっとした音にも非常に敏感に反応されますので、そういう音が生じないような機器があるのか、というところから調べないといけません。さらに、無料配信でご覧になるお客さまの数は、有料で配信した時と比べて、1～2桁多くいるわけですね。ですから、有料にしたときの収入と、有料にするための映像の工夫などの追加の支出との、バランスを考えないと、有料配信で収入確保といっても、実際に計算してみたらイーブンかマイナスということになりかねません。そこは非常に難しいところではありますけれども、有料、無料の別を除けば、やはり先ほどの繰り返しになりますが、初台でしかご覧いただけなかった作品というものを映像で配信することで、新国立劇場のファンが増えるという効果は間違いなくあるわけです。実演でもわれわれは地方にある大型劇場と連携をして全国公演も実施しています。そういう目で見れば、無料だから収入が入ってこないとは思わずに、いろんな工夫をしつつ財務上のバランスを考えながらやっていきたいと考えています⁵。

石田：地方の大型劇場との連携ということで、2020年度は《こうもり》を札幌でやら

⁵ 2021年11月22日に主催公演等の映像配信を行うプラットフォーム「新国デジタルシアター」の開設を発表した。

れたりしました。

村田：全国公演では、2020年に《ニュルンベルクのマイスタージンガー》を兵庫でやる予定にしていたのが飛んでしまいました。それから、令和2年度は、高校生のためのオペラ鑑賞教室を京都のロームシアターで上演しました。ちょうど新型コロナウイルス感染の谷間の時期だったのか、京都ということもあって、《魔笛》を10月に2回公演できています。いつもよりは入場者数は少なかったかなと思います。

石田：《カルメン》をびわ湖で2021年7月に実施されました。その辺りもずいぶん気を使われたかと拝察します。《カルメン》は高校生のための鑑賞教室を私も見学させていただきました。高校生たちも来られなくなって、座席がずいぶん空いている状態で、本当に大変だなと見ておりましたが、観劇した高校生さんたちはすごく集中してご覧になっていたように思いました。

村田：身近な演出になっていましたからね。

劇場主としての新国立劇場、国への要望について

石田：新国立劇場は、民間のオペラ団体とは違い、劇場を自前で持っているというのが大きいかと思いますが、その辺の感染対策の状況、あるいは劇場を持っているならではのご苦労についてお話があったら伺いできますでしょうか。

村田：劇場関係の対策というのは、いくつかあります。新国立劇場は、劇場が3つもあるということと、主催公演だけではなく貸劇場公演もあるということが、難しさをさらに複雑にしているというところはあると思います。

まず、設置当初は、「貸劇場の人が引かなかったらどうするんだ」という話もありましたが、楽屋口にはサーモを置いて体温測定をするということをしています。また貸劇場の

人はリハーサル室をほとんど使わないのですが、うちの主催公演が複数入っているときは、出来るだけ動線が交わらないようにする、あるいは異なる公演の関係者が一緒になることがないようにすることで、1つの公演で発熱者や感染者が出ても、他の公演に影響しないように工夫をしています。レセプションistをお願いしている会社のスタッフについても、会議室をつぶして更衣室にして分散をすとか、いろいろ目に見えないところで工夫もしています。

石田：その他に演出上、演者同士のディスタンス以外のことで気を使われたりしているところがあるとしたら教えていただきたいと思っています。

村田：これは、オペラの事例かどうか分かりませんが、小道具の中に消毒薬みたいなものを入れて、袖に引いたときとか、それで消毒をしているという話を、担当者から聞きました。現場では色々と工夫しているようです。

それと、これはバレエの話ですが、今までには衣裳も使い回すケースもあったのですが、演者が異なれば衣裳も異なるようにして、普段よりは余計に費用がかさむものの、感染対策上必要だということで、やってきています。

また、オペラパレスなどでもエアウィーブの座布団を置くことで、お尻が痛くならないようにしているわけですが、その消毒も毎回やっています。オペラの場合ではあまりないですが、バレエでは1日2回公演というのもあるので、1回目が終わってすぐに業者の方に入ってもらって消毒をすとか、そういう細かいこともあります。

石田：劇場内のレストランや食堂関係というのはどうなのでしょう？

村田：これは、実はわれわれの収入ではなくて、お貸ししている委託先の業者さんの収入になるんです。ピュッフェサービス、レストラン、楽屋食堂をお願いしていますが、

ビュッフェサービスが一番の収入源になっていまして、その収入がなかったのが、彼らにとっては経営的に非常に痛手になっています。楽屋食堂も今はレストランで調理したものをテイクアウトするような形にしております。一番マスクを外す機会になるのは、飲食の時なので、ここは本当に申し訳ないのですが、我慢していただいているところです⁶。

石田：最後に、新国立劇場を統括するお立場で、国に対して要望したいことはありますか。

村田：欧米の劇場も大変ではあると思いますが、歴史のある劇場は、これまでのいろいろな蓄積を活用しながら民間資金も入れやすいと思います。しかし、われわれの場合にはま

だ20数年という非常に短い中で—私としてはこの20年で国内的にはある地位は確立できたと思っていますが—、やはり海外からの認知度としては、新国立劇場はまだまだ知られていないと感じています。これから一皮も二皮も剥けて国際的な劇場にならなければいけない。そこで、フラッグシップとしての新国立劇場に、公演経費も含むような形で支援をしていただけるとありがたいと思っています。

石田：新国立劇場の経営も決して順風満帆ではないと、外からですが拝見しております。ぜひ頑張っていただければと思っています。本日はありがとうございました。

⁶ 2021年10月23日に開幕したバレエ公演『白鳥の湖』において、11月2日、3日の両日からソフトドリンクと軽食の販売を試行している。